

埼玉県が
実施!!

社会人の影になって仕事を観察

ジョブシャドウイングは 生徒の職業意識を どう変えるか

■埼玉県ジョブシャドウイング プログラム

●事前学習(2時間)

- ・ジョブシャドウイングを理解するためのオリエンテーション
- ・マナー講習

●当日(3時間半)

- ・自己紹介、業務概要説明(30分程度)
- ・メンターの業務観察(120分程度)
※「観察」が基本なので作業はしない。
説明・質疑応答は可
- ・一緒にランチをとりながら質問タイム(60分程度)
※午後実施の場合は先にランチ。
事後に質問タイムとする

●事後学習(3時間)

- ・振り返り・体験のシェアリング・作文、お礼状作成

2011年夏、埼玉県がモデル事業として県内の高校生を対象とした「ジョブシャドウイング」を行いました。県がジョブシャドウイングに協力してくれる企業を探し、県内の高校に声をかけて希望者を募り、事前・事後学習会も含めて実施。進学校の生徒を中心に100名以上が参加しました。注目すべきその内容をレポートします。

取材・文／清水由佳



文部科学省
国立教育政策研究所
生徒指導研究センター
総括研究官 教育学博士
藤田晃之先生



東洋大学
経営学部経営学科
准教授
小島貴子先生

進学校の生徒だからこそ ジョブシャドウイングを

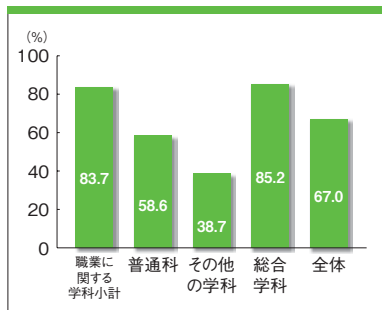
そもそも、ジョブシャドウイングとはどういうものなのか。「全米で定着しているキャリア教育の一つで、主に中学生から高校生の前半くらいの生徒たちが体験しています。社会人に1日、まさに「影」のように付き従い、仕事の様子をずっと観察するというもの。実務体験を伴わないという点で、インターンシップの代替ができるものではないませんが、高い教育効果があると言われています。毎年2月2日は「ジョブシャドウ・デイ」といって、ジョブシャドウイングの体験発表会などが、全米各地で行われています(国立教育政策研究所・藤田晃之先生)。日本では、沖縄県がキャリアアセンターを中心にジョブシャドウイングを推進し、2007年から現在まで高校では十数校が実施している。

この体験の特徴は、基本は1対1で相手の仕事をずっと追うというもの。

「仕事場全体を見る職場見学よりは、社会人の働きぶりにリアルに触れることができます。しかも、インターンシップのように何かを具体的にいうわけではないので、高校生でも専門性の高い職場に受け入れられやすい。受け入れ先も、プログラムを用意するなどの特別な準備が必要ないので、実施の可能性が大きく広がります(藤田先生)」

小・中学校で行われている職場体験活

■インターンシップ実施率



2009年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果(文部科学省)より

■仕事・職業に触れる各プログラムの特徴

	内容	期間	特徴
インターンシップ 職場体験活動	企業や事業所等で実務体験をする	[長期] 1日～数カ月	・実体験に基づいて仕事の内容を理解したり、働く喜びや苦勞を知ることができる
ジョブ シャドウイング	働く人の影となって観察をする	[短期] 数時間～数日	・対応できる職種・業種が幅広い ・[受入側]事前準備や指導の手間・時間が不要
職場見学	企業や事業所等の働く場を観察・説明を聞く	[短期] 1時間～数時間	・事業所の仕事の全体像をつかみやすい ・[受入側]対応人数が少なくすむ
職業人講話	仕事内容や仕事観、キャリアの道筋などを聞く	[短期] 1～2時間	・一人の人の主観に基づいた「考え方」を知ったり、キャリアパスの実例を知ることができる ・一度に大人数での実施が可能

2011年度埼玉県ジョブシャドウイング 実施概要

【実施時期】

2011年7月21日～8月25日までの間のいずれか1日

※受け入れ企業・団体による

●事前学習会：2011年7月18日 9:30～11:30

●事後学習会：2011年8月27日 13:30～16:30

【募集時期】

2011年5月23日～6月24日

【募集人員・応募者数・最終参加者数】

募集人員：100名予定、応募者数：147名(18校)、
最終参加者数：115名(18校)

【受け入れ企業・団体】

エアタヒチヌイ日本支社／(株)衛星チャンネル(朝日ニュー
スター)／(株)角川マガジンス／(株)埼玉りそな銀行／(株)
ジャルパック／(株)JTBフォト／三井物産(株)／(株)読売
新聞東京本社／(株)リクルート／埼玉県庁

ジョブシャドウイングとは何かの説明が重要

今回、事務局として行ったのは①受け入れ企業探し②高校への広報、参加生徒
募集③企業とのマッチング④参加生徒の保険加入の手続き⑤企業との受け入
れ人数・日程調整、諸注意連絡票への記入お願いと生徒への配布⑥事前・事
後学習会の準備と実施⑦学校・生徒・企業へのアンケートと結果報告です。参埼玉県 産業労働部
就業支援課
キャリア教育担当 主幹
久保佳代子氏加生徒には保護者と連名で、SNSで現場の様子を発
信しないなど守秘義務を含む6項目の誓約書も提出して
もらいました。受け入れ企業側には、本当に普段通りで
いいのか、見るだけでいいのか…と戸惑う方も多くいら
っしゃいました。「見ることで生徒が考えることが大事」と
お伝えしましたが、受け入れ側が困らず、生徒にいい体
験をしてもらうためにも、ジョブシャドウイングとは何かを双
方にきちんと理解してもらうことが重要です。

事前学習会ワークシート

ダウンロード可

事前学習の際のワークシートの
一例。当日、影となって仕事を観
察し、気づいたことを記入する「日
報」も作成した。事前学習会では、ジョブ
シャドウイングの意味や
目的などを、小島貴子
先生が講義。真剣に耳
を傾ける生徒たち実際に名刺の受け渡
しなどのロールプレイ
を行った。全員、名前
の入った県の名刺も作
ってもらい、当日はそれ
を持参した動は、商店街など身近なところでの体験
がほとんど。大学進学後に就く仕事とし
て高校生がイメージするような専門性の
高い仕事、例えば医者や企業での交渉や
取り引きといったものは、高校生が実際
に行くことはできない。高校でのインター
シップの実施率を見ても、職業に関する
学科では8割以上が行っているのに、普通
科では6割弱でしか実施されていないの
は、それが理由の一つでもありそうだ。そ
の点、見て、観察するジョブシャドウイン
グであれば、これらの専門性の高い仕事内
容や働く人の考えに、間近で触れること
が可能になる。そこに注目したのが、現在、
埼玉県の雇用・人材育成推進総括参与で
もある小島貴子先生。「進学校では職業体験の実施率が低いで
すが、大学を出て働いている人たちの気持
ちを知ること、学びの意味を考えるう
えでもとても重要です。仕事の場も、日々
の愚直なことの積み重ねで成り立ってい
て、一人ではどうにもならないことがた
くさんある。それは、学校生活や勉強でも同
じで、今やっていることは、将来と確実につ
ながっていくのだということを知ってもら
いたかったんです」。そこで、県の産業労働部が中心となり、
沖縄県の先行事例を参考に、前出の藤田
先生のアドバイスも得てプログラムを実
施。単に企業とのアテンドをするだけでな
く、事前・事後学習も参加者全員を集め
て行い、高校の先生方の負担を減らすこ
とによって、生徒を参加させやすい仕組
みとした。それが功を奏し、県立浦和高校、
県立浦和第一女子高校をはじめとして、県
内の進学校を中心に147名の生徒が応
募。日程や希望企業などとの調整によ
って、最終的には115名の生徒がジョブシ
ャドウイングを体験したのである。社会を体験するための
「がまえ」を作る事前指導事前学習会では、高校生にとっても耳
慣れないジョブシャドウイングがどうい
うものなのか、影となって背後から仕事を見
ることで、どんなことを感じてほしいのか
を、小島貴子先生が熱く語った。「今回は特に、社会人の人が何を思いなが
ら仕事をしているのか、その気持ちを感じ
取ってほしいと伝えました。それによって、

今まで見えなかったものが見えるようになるかもしれない。見て、観察して知ったことは、大きな経験になるはず。自分なりの目標をもって、何か一つでもわかるようになって帰ってきてほしいと伝えました」

さらに、初めて一人で会社を訪れるという、高校生にとっての非日常体験への緊張と不安を解消するための、自己紹介やあいさつなどのマナー講習を実施。笑顔や発声練習、名刺交換など、全員で実際に立って行う場面では、恥ずかしがりながらも一生懸命に取り組んでいた。

「一人で大人ばかりのところに行つて、初めての体験をする。参加する生徒たちは非常に緊張しています。マナー講習は、そん



JTBフォトでのジョブシャドウイング風景。依頼に沿った写真を検索している様子を見て気づいたことをメモする



埼玉りそな銀行でのジョブシャドウイング。銀行業務の中でもオフィスワークがあるということが新鮮だった様子



社内の会議にもジョブシャドウイングによって参加。初めての会議風景に緊張気味



エアタヒチヌイ日本支社でのジョブシャドウイング。問い合わせに即座に対応している様子に興味津々

半日、影に徹して 仕事と職場を観察する

今回、生徒の受け入れに協力してくれた企業・団体は10カ所。高校生は応募の際、受け入れ企業と体験日の一覧をもとに、第3希望までを記入して提出。その応募状況をもとに、県が調整を行い、体験先を決定した。

な緊張している生徒たちに、「自分はこれができるようになった」とちよつとした自信をつけさせてあげるもの。そんな背伸びをする体験も、子どもの成長につながります」(小島先生)

実際に仕事場で影となつて動いたのは、各企業、午前か午後のどちらか2時間ずつ。その前後にランチタイムを一緒に過ごし、職場では聞けなかったような話も気軽にできるよう配慮されていた。

「事前にメンターを一人決め、観察が基本なので、作業はさせず、ご迷惑にならない範囲で説明をしてくださっても結構ですと伝えていました。また、高校生の質問には適宜対応していただきたい」(小島先生)

実際、パソコンに向かつてずっと作業をしていた企業でのジョブシャドウイングを体験した生徒の事後アンケートでは、「パソコンに向かっている時間がとても長かった」と感想をもらし、その上で「一生懸命に働いて

いる人々の姿を見て、自分も会社に、日本に貢献できるように一生懸命働かなくてはならないと感じるようになった」と仕事への真剣な姿勢を感じ取っている様子がうかがえる。

また、銀行でのオフィスワークに触れた生徒は、「銀行だから、営業のような仕事だけかと思つたら、全然そんなことはなく、私の行った事業部は、パソコンで資料を作ったりまとめたという仕事为主で、オフィスでの仕事のみでした。イメージだけで仕事を考えることはできないなと思いました」と感想を述べ、さらに、「鉄道会社の不動産業などで、街づくりについて見てみたい。また、独立行政法人など、国を支える仕事なども見てみたい」と興味を広げている。

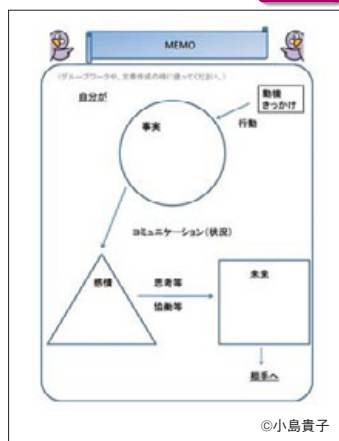
「プロの仕事の間近で見ることによって、子どもたちの視野は広がります。ある特定の仕事を見ただけでも、自分の視野の狭さに気づく。それによって、可能性の広がりを実感するのです。また、しばらく仕事を観察することで、間違いなく、大人のすごさを感じ取っています。ジョブシャドウイングを行う価値は、まさにそういう体験ができるということなんです」(藤田先生)

振り返りとシェアで 経験が意味あるものに

参加者が体験した職場や仕事内容はさまざま。非常に静かなオフィスで、緊張

事後学習会ワークシート

ダウンロード可



小島さんがキャリア教育で使用している「伝える」ためのフロー。まず、体験したことの「事実」があり、それによって何を感じたかという「感情」を言葉にし、今後どうするかという「未来」を考える

感漂う中、黙々とパソコンに向かっていた職場もあれば、職場の人同士がニクネームで呼び合うフランクな職場で、いろいろな人とかかわりながら仕事を進めていた職場もある。そこで、事後学習会の前半は、お互いの体験を伝え合うグループワークを実施した。

「体験したことを人に伝える難しさも、ここで体感してもらえればと思いました。体験した事実だけでは、相手に伝わらない。何を見て、それをどのように理解し、さらに今後、自分がどうしていきたいと思ったのか。そこまで言えるようになっていくのかな。そうすると、今の自分に足りないものも見えてくるし、実現したい未来に向けて、何が必要なのかがわかってくる。それこそが、キャリア教育の本当の目的です。見てきたことを、今にいかにつなげるか。実際にやってみると、今回参加した生徒たちは、次につなげていく力があるなと感じました」(小島先生)

アンケートでも、「自分の中であやふや



事後学習会では、自分と違う会社を体験してきた他校の生徒とグループになって、それぞれの体験をシェアした



最後に、自分の体験を改めて文章にし、体験した企業に対してお礼状を書く。夏休みの貴重な体験の締めくくり

となつてしまった体験が、しっかりと形になつてよかった」「体験を言葉にすることが難しいとわかった。他の人の体験を聞いている情報が入った」「同じ会社を体験したメンバーとは違う人と交流をもてよかった。コミュニケーション能力をより深められた」など、しっかりと意図を受け止めていたようだ。

最後は、体験させてもらった企業へのお礼状を書き、体験を締めくくった。

「マナー講習やどこを見るか考えさせる

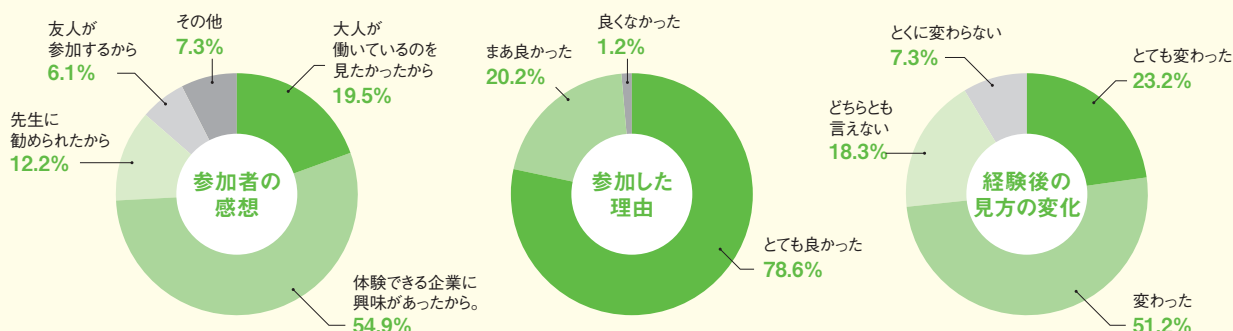
生徒たちの感想

「埼玉県広聴広報課というところに行きました。テレビ・ラジオ担当の方々が企画した番組の収録現場に実際に行き見学しました。(中略)2カ月前から企画するということを知り、テレビの見方が変わりました。リハーサル・本番ともに緊張した空気の中で行われていて、打ち合わせのときには、多くの意見が飛び交っていて、圧倒されました。(中略)どの仕事に就くにも、コミュニケーション能力がとても大切だと感じました」

「旅行の予約の受け付けや、問い合わせの受け答えなどをしていました。

社員の人は電話で受け答えしながら、すばやく資料を探したり、情報をパソコンに入力したりしていました。私は、とても大変そうだなと思ったのと同時に、社員の人がお客さんに真剣に向き合っている姿を見て、よい気持ちになりました。(中略)私はもっと広い視野をもって、知識を増やさなくてはならないと感じました。このような仕事をするには、言語も大切だと思うので、日本語を正しく、美しく使いたいと思いました。英語を話せるとなおよいとおっしゃっていたので、学校で英語の勉強をもっと頑張りたいと思いました」

※事後学習での作文より抜粋



【アンケートコメントより】「実際に会議に参加できて、とてもよかった。海外に勤めるという道がよりクリアになった」「今さらながら、大人はみんな働いているんだなあと実感した。進路について、前向きに考えていこうと思うようになった」「将来の目標が定まり、英語など必要なものがわかった」「子どものころになりたかった職業じゃないと言っていたけど、楽しそうに仕事をしていた」「将来に向けて、勉強や体験、ボランティア活動などしてみたいと思った」「大人はいろいろな思いをもって働いていると思うようになった。自分をもっと勉強しようと思った」

■ 生徒を参加させた先生方のコメント

総合学習の中の体験として貴重な機会の一つ

当校では、総合学習に職業調査があり、夏休みを利用して行っています。その中で医療や看護体験などに参加する生徒もいました。2011年は、そのひとつに、このプログラムも学生に案内しました。大手企業でのオフィスワークを中で見られることは、滅多にない機会であり、希望者が多数出ました。学校単位ではなかなか準備できないラインナップであり、今後も活用したいと考えています。

県立浦和第一女子高校 進路指導部 高城健次先生

コミュニケーションの重要性を認識して戻ってきました

参加した生徒は、働くことに非常に前向きな気持ちを抱いたようです。日頃のコミュニケーションの重要性も感じたようです。体験した生徒の感想は学校新聞で全校に共有しましたが、いずれどこかで発表の機会なども検討したいとは思っています。「将来を意識して今を頑張る」ために、とてもいいプログラムだと思います。

県立熊谷西高校 教頭 利根川典子先生

ホンモノに触れる貴重な機会

中学でも職業体験をしている学校が多いようですが、それとは多少異なり、自分の理想に近い職業の方々実際に働く姿を観察することで、社会で働くということについて考えるよいきっかけになったと思います。「社会人になる＝組織の一員になる」という認識ができたようで、職種というよりも、すべてに共通する社会人とは、働くとは、イメージができたようです。今後のキャリア教育において重要な指針となりました。

県立和光国際高校 教頭 加藤 浩先生

■ 編集部より

メンターとして体験したジョブシャドウイング

キャリアガイダンス編集部では本が作られる場に興味があるという、男女2人の生徒を受け入れた。社員食堂のランチでアイスブレイキングと小誌の説明を行った後、1時間はデスクワーク、その後1時間は小誌ライターも交えての編集企画会議をシャドウイングしてもらった。デスクで黙々と仕事をしている時、ふと気が付くと離れて後ろに座っていたはずの高校生の顔がかなり近くに迫り、手元のメモにはびっしりと何かが書かれていた。続いて同じテーブルに着いての会議では、こちらがアイデアをぶつけ合って盛り上がってくると生徒も一緒に真剣かつ楽しそうになってくる。

その後は質疑応答の時間。聞かれたのは働くことの楽しさや苦労、必要な力といったものから、「教育関係の雑誌を作っているのに、関係ない分野の本が机に載っているのはなぜか」「どんなソフトウェアを使って仕事をしているのか」という意外な質問まで。また「編集長はパソコンの作業が苦手らしい」と見抜いていた。働くことの理解に近づくには、彼らが持ったような細かい気付きから大きな疑問までをどれだけ積み重ねられるかが大切なかもしれない。

乱雑な机の上から見えるもの、オフィスの雰囲気から感じるもの。2時間の観察で得られるものはこちらが想定したよりも大きかったようだ。3時間が終了し、一緒に帰路についてライター氏によると、オフィスを出たとたん彼らの緊張が一気に緩み、何が面白かったのかをすごい勢いで語り合いはじめたという。後日送られてきた礼状には「編集への興味や、仕事への疑問がわいた」ことが良かったと書かれていた。

江森真矢子(本誌編集)

事前学習会から始まり、体験したことの意味をしっかりと振り返る事後学習やお礼状を書くまで、きちんとセットになっているところが、今回のプログラムのよくできている部分だと思います。特に事後学習でのシェアリングはとても大事。自分が体験した会社だけでなく、他社の話によって違いがいろいろあるということにも気づく人によって感じ方がさまざまということもわかる。その一方で、違う会社なのだけども、仕事や働くということに、共通性も感じられるはず。そういう違いと共通性を確認できることも大切ですね(藤田先生)

職業観形成支援の 新手法として広がるか?

今回の埼玉県のジョブシャドウイングでは、行政が中心となって実施したが、仕事体験をさせるインターンシップに比べ受け入れ企業にとっても負担の少ないジョブシャドウイングは、企業にも依頼がしやすい。

く、学校単位で行うにも比較的取り掛かりやすいものといえる。
「保護者やOB・OGを活用すれば、学校独自のジョブシャドウイングも、十分実現可能だと思いますよ」(小島先生)
実際、今回受け入れを行った企業へのアンケートでも、受け入れに際して「特段準備をしなかった」が3割で、それ以外の企業は簡単な準備をした程度と回答。負担感も、あまり感じなかったという答えが多かった。しかも、ジョブシャドウイングは企

業にもメリットがあったという。
「高校生が職場にいて、職場が活性化されたそうです。制服を着た高校生の姿に、『何? どうしたの?』とあちこちで話題になったようですし、ランチタイムなども盛り上がったようです。またメンターが自分の仕事を客観的に振り返れてよかったという声もありました」(小島先生)
職業観の形成・確立を支援するための新たな手法として、これからの広がりを期待したい。